埼玉県における古墳時代の祭祀遺跡
―調査と研究のあゆみ―

大谷　徹

要旨　埼玉県における古墳時代の祭祀遺跡・祭祀遺物を対象に、その発見と調査・研究のあゆみを跡づけながら、古墳時代人が執り行った神祭りの実態と多様性の一端を明らかにすることが本稿の目的である。

明治初期から始まる本県の調査・研究の推移を大きく４時期に区分し、整理を行った。本稿で取り上げた遺跡や遺構は、自然物を対象とした祭祀遺跡だけでなく、大規模開発に伴う発掘調査によって資料が蓄積されてきた、多様な集落内祭祀や住居内祭祀、水辺の祭祀などに関連する事例を積極的に取り上げた。あわせて、石製模造品や土製模造品、子持勾玉などの祭祀遺物や祭祀行為の痕跡を示す遺物についても検討した。

1　はじめに

令和元年（2019）12 月、行田市若小玉に所在する北大竹遺跡の第 18 次調査Ｂ区から１個の子持勾玉が発見された。年が明けた１月には須恵器大甕が並んだ状態の遺物集中１が、そして３月には足の踏み場のないほどに須恵器や土師器などの器物が集積された遺物集中２が見つかり、６世紀後半から７世紀前半を中心に営まれた大規模な祭祀遺構群がその姿を現した（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2021）。祭祀遺跡研究の新たな１ページが刻まれた瞬間であった。

本稿では、埼玉県における古墳時代を中心とした祭祀遺跡（遺構）・祭祀遺物に関する調査履歴や研究史を振り返りながら、研究の現状と課題について整理を行い、古墳時代人が執り行った神祭りの実態と多様性の一端を明らかにすることを目的とする。

なお、今回取り上げた遺跡・遺物は多岐にわたっているため、必ずしも祭祀遺跡、祭祀遺構として大方の支持を得られない事例も含まれていることを危惧する。なかでも、古墳出土の滑石製模造品については、死者の祭り（葬送儀礼）として評価すべき遺物であるが、明治・大正時代における研究の黎明期には、模造品研究がその主座を占めていた時期があることから、ここでは検討の対象に含めている。また、取り扱う時代も、弥生時代終末から飛鳥時代までの前後の時期も含めていることをご寛恕願いたい。

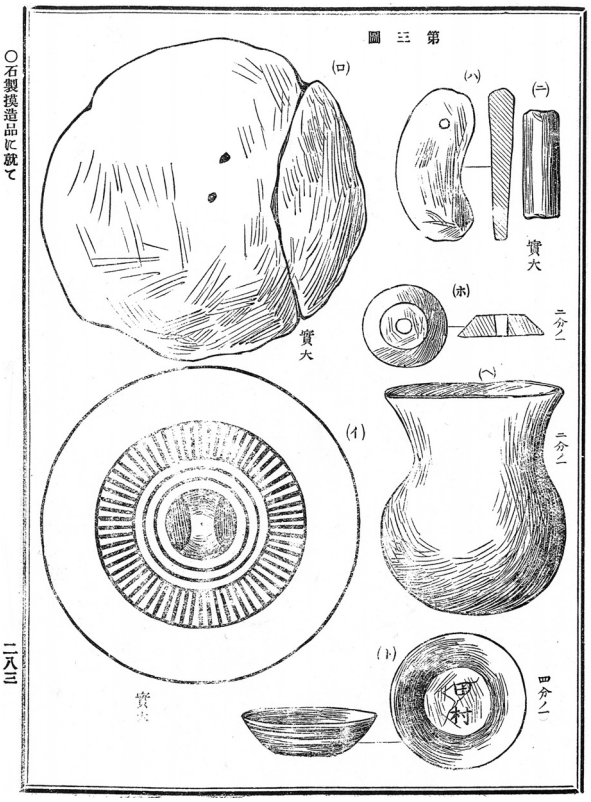
2　調査と研究のあゆみ

2－1　黎明期（明治時代～戦前）

○根岸武香と胄山村字雷船木山下の石製模造品

埼玉県における祭祀遺跡研究の萌芽は、明治 11 年（1878）５月 25 日、好古家として知られる根岸武香によって大里郡胄山村（現熊谷市）字雷船木山下から発掘された石製模造品の発見に始まる。

出土品については、明治 13 年（1880）頃に編纂された『武蔵国大里郡吉見村誌』に綴じこまれた薄冊「村誌　大里郡胄山村」に４枚の折り込みの彩色図（註１）に詳細に描写されているほか、明治 33 年（1900）に大野延太郎（雲外）が論考「石製模造品に就て」で紹介している（第１図：大野 1900 ｂ）。重圏文鏡をはじめとする、滑石製の有孔円板（模造鏡）・勾玉・管玉・紡錘車、坩などの祭祀遺物のほか、「田村」墨書土器などがあ



第１図　冑山村字雷船木山下出土品(大野1900ｂより)

る（塩野 2004）。折しも、この年はエドワード・Ｓ・モース（東京大学御雇教授）が大森貝塚（東京都品川区）を発掘し、それに触発された根岸が黒岩横穴墓群（吉見町）を発掘した翌年にあたり、根岸の考古学への関心が高揚していた時期に符合する。

発掘された経緯については、明治 27 年（1894）１月に建碑された『船木神社修造之記』に詳しい。根岸の撰文による碑文には「會丘麓を堀りて鏡・玉・瓶・瓮を獲る。是れ古の祭器也。益口碑を信じ、之を評すべからざる也」と記されている。碑文中、會（たまたま）と謙遜している根岸を評して、宮瀧交二は「船木神社が所在する小高い丘を発掘して「古老相傳」の船木神社建立にまつわる「口碑」を考古学的に解明しようとした根岸の科学的探究心」のあらわれと高く評価している（宮瀧 2006）。また、明治 35 年（1902）に亡くなった根岸の追悼号として刊行された『東京人類学会雑誌』第 207 号でも、柴田常恵によって紹介されたことから広く学界に知られた（柴田 1903）。

ところで祭祀遺跡に関する研究史を紐解くと、明治 33 年（1900）に大野延太郎が「安房國安房郡東長田村遺跡に付て」で祭祀遺跡の報告を初めて行い、同年に前述の「石製模造品に就て」の中で「石製模造品（大野の命名）」や「土製模造品」の出土地が祭祀遺跡に該当することを指摘したことが、研究の端緒とされていることからも（中村 2009）、黎明期の考古学界の発展に寄与したことは間違いのない事実である。

○柴田常恵と「こぶヶ谷戸祭祀遺跡」

明治 37 年（1904）２月 19 日から３月の初めにけて柴田常恵が、埼玉、群馬両県を踏査した記録に「児玉郡大澤村大字猪俣字天神河原こぶ石は低卑の地なるが、実用品とは如何にしても思はれざる小形の土器を発見した」とする記述がある（柴田 1904）。これが文献に記された美里町こぶヶ谷戸祭祀遺跡の初見である。

○金鑽宮守と「亀甲山祭祀遺跡」

学史的に重要な遺跡として、かつて児玉郡松久村（現美里町）大字甘粕字向田に所在した亀甲山祭祀遺跡をあげることができる。

天神川が開析した小残丘の亀甲丘（南北 120 m・東西 70 m・比高 5.5 m）に形成された遺跡で、大正３年（1914）、「山の老松を伐採せし時に、該木の倒れたる根下より、多数の古き素焼の湯呑の如き、形せる土器数個重なり出でたり、又小き瓶の形をせるものも発見せし」との口碑を証するために、金鑽神社宮司の金鑽宮守が「採掘し試みたるに老樹の間所々に、多くの破片は出てたれども、完全のものなかりしが、漸く山の西北の半腹より下の所より、一ヶ所土地に多く埋没せるを発見したり、其の採集土器は別記の如き種類のものなり」と記している（第２図：金鑽 1926）。

現在、亀甲山は 1970 年代の圃場整備事業により削平されてしまい、往時の面影は消えてしまったが、丘の頂上付近にあった岩石だけが、数

第１表　埼玉県における祭祀遺跡の調査と研究のあゆみ（１）－明治時代から戦前まで－

和暦	西暦	調査・発見	研究・文献	当時の出来事
明治 10	1877			エドワード・S・モースによる大森貝塚の調査 根岸武香による黒岩横穴の調査
明治 11	1878	大里郡胄山村字雷船木山下		
明治 12	1879			
明治 13	1880		『武蔵国大里郡吉見村誌』「村誌 大里郡胄山村」	
明治 14	1881			
明治 15	1882			
明治 16	1883			
明治 17	1884			
明治 18	1885			
明治 19	1886			
明治 20	1887			坪井正五郎による吉見百穴の調査
明治 21	1888			
明治 22	1889			
明治 23	1890			
明治 24	1891			
明治 25	1892			
明治 26	1893			
明治 27	1894		『船木神社修造之記』石碑建立	日清戦争勃発
明治 28	1895			
明治 29	1896			
明治 30	1897			
明治 31	1898			
明治 32	1899			
明治 33	1900		大野延太郎「石製模造品に就て」『東京人類学会雑誌』169	
明治 34	1901			
明治 35	1902			
明治 36	1903		柴田常恵「武蔵の古墳」『東京人類学会雑誌』207 大野延太郎「根岸家の古物に就て」同上書	
明治 37	1904	児玉郡大澤村大字猪俣字天神河原こぶ石	柴田常恵「埼玉、群馬両縣下踏査概記」『東京人類学会雑誌』216	日露戦争勃発
明治 38	1905			
明治 39	1906			
明治 40	1907			
明治 41	1908			
明治 42	1909			
明治 43	1910			
明治 44	1911			
明治 45 大正元	1912			
大正 2	1913			
大正 3	1914	児玉郡松久村大字甘粕字向田亀甲山		
大正 4	1915			
大正 5	1916			
大正 6	1917			
大正 7	1918			
大正 8	1919		高橋健自『古墳発見石製模造器具の研究』帝室博物館学報 1	史蹟名勝天然紀念物保存法の制定
大正 9	1920			
大正 10	1921			
大正 11	1922			
大正 12	1923			
大正 13	1924			
大正 14	1925	児玉郡北泉村久下塚古墳		
大正 15 昭和元	1926		金鑽宮守『埼玉縣史蹟名勝天然紀念物調査報告 3 輯 史蹟之部』埼玉縣 岩澤正作「児玉郡々志資料視察雑記 (1)」『上毛及上毛人』106	

和暦	西暦	調査・発見	研究・文献	当時の出来事
昭和２	1927		小暮秀夫『武蔵國兒玉郡誌』	
昭和３	1928	桶川町熊野神社古墳		
昭和４	1929			後藤守一による赤堀茶臼山古墳の調査
昭和５	1930	児玉郡新郷村／大里郡吉見村大字相上字前原 入間郡鶴ヶ島村高倉字不二塚（富士塚）	後藤守一「石製品」『考古学講座』29	
昭和６	1931		有隅豊吉『原始時代に関する村考 (抄)』	
昭和７	1932			
昭和８	1933			後藤守一による馬室埴輪窯跡の調査
昭和９	1934			後藤守一による白石稲荷山古墳の調査
昭和 10	1935			群馬県下一斉の古墳分布調査 大場磐雄、神道考古学の提唱
昭和 11	1936			
昭和 12	1937			日中戦争勃発
昭和 13	1938			埼玉村古墳群国史跡指定 群馬縣『上毛古墳綜覧』
昭和 14	1939			
昭和 15	1940			
昭和 16	1941			太平洋戦争開戦
昭和 17	1942			
昭和 18	1943			大場磐雄『神道考古学論攷』
昭和 19	1944			
昭和 20	1945			ポツダム宣言受諾・太平洋戦争終結

年前まで天神川のほとりに残されていた（志塚 2021）。

○高橋健自『古墳発見石製模造器具の研究』

大正８年 (1919)、高橋健自が『古墳発見石製模造器具の研究』において古墳出土の石製模造品を分類し、総合的な研究を行った（高橋 1919）。「石製品の分布」の項で、大里郡吉見村冑山から鏡・勾玉などの模造品が出土していると記している。しかし、石製模造品は古墳からの出土を主体とするものであるという認識から、祭祀遺跡の存在については否定的な見解を示した。

○岩澤正作・小暮秀夫と「公卿塚古墳」

群馬県における考古学研究の礎を築いた岩澤正作が、大正 14 年（1925）12 月から大正 15 年 (1926) 1 月にかけて児玉地域を巡検した際の詳細な巡検記が、上毛郷土史研究會の機関誌『上毛及び上毛人』第 106 号から第 109 号の４回に分けて掲載されている（岩澤 1926）。12 月 26 日の記録「久下塚」によって本庄市公卿塚古墳から出土した石製模造品をはじめとする土器などの発掘時の様子を、関係者からの聞き取りによって知ることができる。

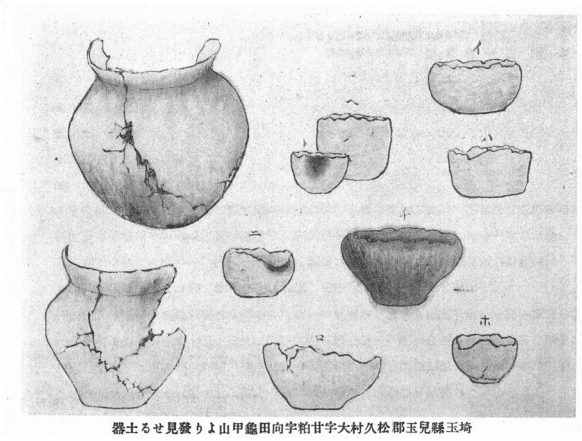
また、昭和２年（1927）に小暮秀夫が著した『武蔵國兒玉郡誌』には公卿塚古墳から出土した石製模造品が拓影図とともに紹介されている（小暮 1972）。それによれば、「北泉村久下塚の公郷から発見せられたもので、刀子と鑿があるが、鑿は袋部に目釘穴が穿たれてゐる、之は久下塚の飯塚長吉氏の発見で現品は金鑽に保管されてゐる」とあることから、大正年間に発見され、金鑽神社に保管されたのであろう。

昭和 38 年（1963）には、柳田敏司によって金鑽神社に所蔵されている石製模造品（斧３・直刃鎌４・刀子９・臼玉３）が報告されている（柳田 1963）。

○後藤守一「石製品」『考古学講座』

昭和５年（1930）に亡くなった高橋健自の跡を引き継ぎ、後藤守一が『考古学講座』第 29 巻に「石製品」をまとめている（後藤 1930）。その中で、武蔵国大里郡吉見村（現熊谷市）大字相

圖取見山甲龜田向字柏甘字大村久松郡玉兒縣 玉埼



器土るせ見發りよ山甲龜田向字柏甘字大村久松郡玉兒縣玉埼

第２図　亀甲山祭祀遺跡（金鑽1926より）

上字前原から出土した土製模造品を紹介している。土製勾玉・管玉（土錘）・丸玉の類は「畠中より発見されたもので、発見の当時、墳丘・石室等の古墳としての徴証となるべき何等の遺構も見ることが出来なかった」としている。

なお、この資料は江戸・明治期に活躍した国学者の黒川真頼の子息である黒川真道の所蔵品であることも注目される。黒川真道は明治21年（1888）に東京帝国大学古典科を卒業し、『古事類苑』編纂の嘱託となり、帝国博物館に勤務していた。

また、子持勾玉として藤岡町（現群馬県藤岡市）の浅見作兵衛の所蔵する児玉郡新郷村出土品を紹介している。「滑石製、長さ10.8糎、尾部を欠失しているが、背に３個、腹に１個、左右両側に各２個の「子」を有する様式」であると記述している。ただし、児玉郡内には新郷の地名はなく、正確な出土地については不詳である。この他に別項で「石製模造器具発見の遺蹟」に児玉郡松久村大字中里をあげているが、詳細は不明である。

○有隅豊吉と鶴ヶ島村不二塚出土の石製模造品

昭和５年（1930）から昭和９年（1934）頃にかけて、郷土史家の有隅豊吉により鶴ヶ島村（現鶴ヶ島市）大字高倉字不二塚（富士塚）で、勾玉や剣形品、有孔円板などの石製模造品、切子玉などが採集されている（鶴ヶ島町史編さん室1987）。当時、有隅は剣形品のことを「横形石槍」と呼んでおり、祭祀遺物（模造品）としての認識をもっていなかったようである。

○大場磐雄「神道考古学」の提唱

太平洋戦争に向かう帝国主義の時代、県内では昭和８年（1933）の後藤による鴻巣市馬室埴輪窯跡の調査や昭和13年（1938）の埼玉村古墳群国史跡の指定など見るべき動きはあったものの、祭祀遺跡の調査・研究は一時停滞してしまう。

しかし、昭和10年（1935）に神道の歴史と信仰を考古学的に明らかにしようとする「神道考古学」が大場磐雄によって提唱され（大場1935）、昭和18年（1943）には、その骨子を示した『神道考古学論攷』（大場1943）がまとめられた。宗教考古学の一分野として「神道」に代表される日本固有の宗教を考古学的に取り扱おうとする機運が高揚した時期であった。

当時、内務省神社局考証課にいた大場は、全国の神社調査を精力的に行う傍ら、たびたび本県にも訪れており、戦後における本県の祭祀遺跡研究を牽引する素地が培われていたことを予感させるものである。

２－２　確立期（戦後～昭和50年代）

戦後の復興期、昭和30年代から始まる高度経済成長期、そしてその後の安定成長期を背景とする時期を研究の「確立期」として区分する。

埼玉県の考古学研究の礎を築いた小澤國平と大場によって、本県を代表する深谷市今泉（狢山）祭祀遺跡、美里町こぶヶ谷戸祭祀遺跡、熊谷市西

別府祭祀遺跡などの重要遺跡が相次いで調査されている。その一方で、東京大学や早稲田大学などによる学術調査が行われるとともに、大場門下生による県内各地の祭祀遺跡・遺物の報告がなされている。

さらに、昭和40年代は、住宅団地や上越新幹線、関越自動車道等の建設に伴う大規模発掘調査が始まった時期に重なり、これまであまり問題視されてこなかった集落内祭祀や住居内祭祀、石製模造品の製作跡（工房）などの調査事例が増加し、新たな研究テーマとして注目されはじめた。

○山田勝利・大護八郎と「氷川神社境内遺跡」

戦後間もない昭和23年（1948）には、川越氷川神社宮司の山田勝利により川越市氷川神社境内遺跡から滑石製の剣形模造品が採集された（山田1966）。この資料は、石仏研究の泰斗、大護八郎が『遠古の川越』（大護1954）や『川越市史』第1巻（大護1972）にも紹介し、巷間に知られている。

なお、平成7年（1995）には岡田賢治によって伴出遺物なども資料紹介され、氷川神社周辺の古墳時代集落の様相についてまとめられた（岡田1995 a）。

○新井幸造と「新嘗井遺跡」

遺物の採集された時期は判然としないが、郷土史家の新井幸造によって川越市名細地区の新嘗井遺跡から石製模造品が採集されたのも戦後復興期のことであったと考えられる（塚本1984）。

石製模造品には、剣形品・勾玉・管玉・臼玉・有孔円板などの製品とその未成品が見られることから、現状では祭祀遺跡と断定することは難しく、石製模造品の製作跡の可能性が高いと考えられている（岡田1995 b）。

○東京大学による水深遺跡の学術調査

昭和25年（1950）には東京大学文学部考古学研究室の駒井和愛・曾寿彦・中川成夫らによって、北埼玉郡水深村（現加須市）の水深遺跡が学術調査された。竪穴住居跡から滑石製剣形模造品や土玉などが出土している（駒井1950）。

○稲村坦元・柴田常恵『埼玉縣史』第1巻

昭和26年（1951）、『埼玉縣史』第1巻 先史原史時代が刊行された（稲村・柴田1951）。そのなかで古墳時代の遺跡のひとつとして「祭祀の遺蹟」が取り上げられている。やや長くなるがその部分を引用すると「縄文式土器・石器時代の民族にても既に或種の信仰を持ち、宗教的の遺物を存する程であるから、此時代に於ても信仰関係の祭祀の遺蹟を存する筈である。かゝ遺蹟は多くは水邊、または丘陵の上部にて展望の佳良なる土地等に見られ、墳墓・住居・城塞等に非ずして特殊の祭祀用遺物を出す場所が往々にして存するもの即ち之であって、本縣にては児玉郡松久村廣木の如き即ち其の一例である」と紹介している。

これは祭祀遺跡を古墳や集落跡、生産跡などともに、地域社会を構成する重要な「宗教関連遺跡」として明確に位置づけたことを示している。当時、内務省嘱託をしていた柴田が、県史編纂事業の監修顧問として関わっていたことが大きな影響を与えたのであろう。学史を顧みれば、柴田は概説書においてはじめて「祭祀阯」の項目を立て、模造品出土遺跡を列挙しながら、非実用品としての性格を論じている（柴田1924）。

○小澤國平・大場磐雄による祭祀遺跡の調査

小澤國平は、昭和30年（1955）、埼玉考古学会創立に力を尽くし、その副会長として、会の発展に功績を残し、県内の遺跡・遺物の発掘にも、常に指導的な役割を果たした。埼玉県の考古学界に大きな足跡を残した人物である（斎藤1985）。

昭和30年に岡部村今泉（狢山）祭祀遺跡、昭和34年（1959）に美里村こぶヶ谷戸祭祀遺跡、そして昭和38年（1963）には熊谷市西別府祭祀遺跡を立て続けに調査している。本県の祭祀遺跡研究の礎を築いた先駆者である（井上2020）。

今泉（狢山）祭祀遺跡　JR高崎線「岡部駅」

第２表　埼玉県における祭祀遺跡の調査と研究のあゆみ（２）－戦後から現在まで－

和暦	西暦	調査・発見	研究・文献	当時の出来事
昭和 21	1946			
昭和 22	1947			カスリーン台風
昭和 23	1948	川越市氷川神社境内遺跡		
昭和 24	1949			法隆寺金堂壁画焼失
昭和 25	1950	北埼玉郡水深村水深遺跡		文化財保護法の施行 松山高校郷土部による吉見百穴の調査
昭和 26	1951		埼玉縣『埼玉縣史』1 先史原史時代	サンフランシスコ講和条約調印
昭和 27	1952			埼玉県 文化財保護条例制定
昭和 28	1953			埼玉県 文化財保護係設置
昭和 29	1954		大護八郎『遠古の川越』	
昭和 30	1955	岡部村今泉 (貉山) 祭祀遺跡	駒井和愛「埼玉県北埼玉郡水深遺跡」『日本考古学年報』3 小澤國平『今泉祭祀址と祭器』	埼玉考古学会発足 埼玉県下一斉の古墳分布調査
昭和 31	1956		小澤國平「岡部村今泉出土の祭器」『武蔵野史談』3-3 玉口時雄『秩父 - 土師器を中心として -』 村井嵓雄「武蔵国川田谷熊野神社境内所在の古墳」『考古学雑誌』41-3	
昭和 32	1957	秩父市井ノ尻遺跡		大場磐雄による伊興遺跡の調査
昭和 33	1958	妻沼町大我井遺跡 長瀞町宝登山神社参道遺跡	直良信夫「埼玉県秩父市井ノ尻遺跡」『日本考古学年報』10	
昭和 34	1959	美里村こぶヶ谷戸祭祀遺跡	文化財保護委員会「今泉祭祀遺跡出土品一括」『埋蔵文化財要覧』2	
昭和 35	1960		小澤國平『こぶヶ谷戸祭祀遺跡発掘調査報告書』	
昭和 36	1961	本庄市東五十子城跡遺跡		
昭和 37	1962	皆野町大背戸遺跡 上尾市藤波遺跡		全国総合開発計画の策定 大場磐雄『武蔵伊興』國學院大學考古学研究報告 2
昭和 38	1963	熊谷市西別府祭祀遺跡 東松山市天神裏遺跡	大場磐雄・小澤國平「新発見の祭祀遺跡」『史跡と美術』338 柳田敏司「本庄市公卿塚と石製模造品」『埼玉考古』1 栗原文蔵「上尾市藤波発見の祭祀遺物」『埼玉研究』7	
昭和 39	1964	東松山市天神裏遺跡		東京オリンピック開催
昭和 40	1965	美里村こぶヶ谷戸祭祀遺跡	玉口時雄・小林茂「秩父大背戸遺跡採の石製模造品について」『埼玉考古』3 小茂田勇「こぶヶ谷戸祭祀遺跡発掘概報」『いぶき』1	上尾市尾山台遺跡の調査
昭和 41	1966	越谷市見田方遺跡	山田勝利「川越氷川神社の石剣について」『埼玉県神社庁報』64 大場磐雄「祭祀遺跡について」同上書	小出義治「祭祀」『日本の考古学』V 亀井正道『建鉾山』
昭和 42	1967	越谷市見田方遺跡 東松山市番清水遺跡 浦和市本村遺跡	鈴木貴徳「見田方遺跡発掘」『ひびき』9	埼玉県遺跡調査会発足 大場磐雄『まつり』
昭和 43	1968	浦和市本村遺跡	金井塚良一『番清水遺跡調査概報』埼玉県遺跡調査会報告 1 塩野博「妻沼町太我井遺跡発見の祭祀遺物」『埼玉研究』16	
昭和 44	1969	浦和市本村遺跡		
昭和 45	1970			東北自動車道の調査開始 大場磐雄『祭祀遺蹟』
昭和 46	1971	本庄市西富田新田遺跡	高橋一夫「石製模造品出土の住居跡とその性格」『考古学研究』18-3 和島誠一『見田方遺跡発掘調査報告書』	関越自動車道の調査開始 埼玉県 文化財保護室設置
昭和 47	1972		大場磐雄「埼玉県の祭祀遺跡」『神道宗教』65・66 椙山林継「関東」『神道考古学講座』2 大護八郎『川越市史』1 原始・古代編	奈良県高松塚古墳で壁画が発見される 『神道考古学講座』2 原始神道期 1 『神道考古学講座』5 祭祀遺物特説
昭和 48	1973	杉戸町上椿遺跡 東松山市舞台遺跡 (2 次)	小澤國平「美里村こぶヶ谷戸祭祀遺跡発掘調査概要」『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧』 亀井正道「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』8	埼玉県 文化財第三係設置 土曜考古学会発足 『神道考古学講座』6 関係特論
昭和 49	1974	美里町長坂聖天塚古墳	谷井彪『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』埼玉県遺跡発掘調査報告書 5	『神道考古学講座』4 歴史神道期
昭和 50	1975	本庄市後張遺跡	高橋一夫「和泉・鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究』2	
昭和 51	1976	本庄市後張遺跡 鶴ヶ島町山田遺跡 A・B 地点	本庄市『本庄市史』資料編	

和暦	西暦	調査・発見	研究・文献	当時の出来事
昭和 52	1977	鶴ヶ島町山田遺跡Ｃ地点 児玉町ミカド遺跡 庄和町尾ヶ崎遺跡	高橋一夫「考古学研究と三段階論」『情報』3 妻沼町誌編纂委員会『妻沼町誌』	
昭和 53	1978	深谷市割山埴輪窯跡 岡部町石蒔Ａ遺跡		埼玉稲荷山古墳鉄剣銘文発見
昭和 54	1979		沼野勉「古代の神社と祭祀遺跡についての一考察 (上)」『埼玉地方史』7	
昭和 55	1980		高橋一夫「6 世紀の集落と人々」『鉄剣を出した国』	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団設立 群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡の調査
昭和 56	1981	本庄市社具路遺跡 杉戸町下椿遺跡	沼野勉「古代の神社と祭祀遺跡についての一考察 (下)」『埼玉地方史』11 椙山林継「祭祀遺跡地名表 (2) 関東編 2」『神道考古学講座』3 坂本和俊・鈴木徳雄『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書 2 西川制『脚折遺跡群発掘調査報告書』	『神道考古学講座』1 前神道期 『神道考古学講座』3 原始神道期 2
昭和 57	1982	本庄市社具路遺跡	増田逸朗『後張Ⅰ』埼玉埋文報告書 15 小野真一『祭祀遺跡地名総覧』考古学ライブラリー 11	群馬県黒井峯遺跡の調査
昭和 58	1983	蓮田市荒川附遺跡 さいたま市須黒神社遺跡 行田・熊谷市小敷田遺跡	増田逸朗『後張Ⅱ』埼玉埋文報告書 26	埼玉稲荷山古墳金錯銘鉄剣国宝指定
昭和 59	1984	川越市御伊勢原遺跡 川越市女堀Ⅱ遺跡 行田・熊谷市小敷田遺跡	塚本国男「川越市小堤字新誉井の祭祀遺跡」『いしずえ』7	埼玉県遺跡調査会解散
昭和 60	1985	川越市御伊勢原遺跡 川越市上組Ⅱ遺跡 深谷市新屋敷東遺跡 行田・熊谷市小敷田遺跡	塩野博・杉崎茂樹「埼玉県」共同研究「古代の祭祀と信仰」附篇「祭祀関係遺物出土地名表」『国立歴史民俗博物館研究報告』7	共同研究「古代の祭祀と信仰」『国立歴史民俗博物館研究報告』7
昭和 61	1986	川越市上組Ⅱ遺跡 深谷市新屋敷東遺跡 深谷市本郷前東遺跡 行田・熊谷市小敷田遺跡	埼玉県立博物館『古代の祭祀 (まつり)』	
昭和 62	1987	深谷市本郷前東遺跡 深谷市起会遺跡 大宮市御蔵山中遺跡	立石盛詞『女堀Ⅱ・東女堀原』埼玉埋文報告書 68 増田逸朗「古墳時代の信仰と祭祀」『新編埼玉県史』通史編 1 鈴木徳雄『秋山東遺跡』児玉町遺跡調査会報告書 2	
昭和 63	1988		小倉均「弥生時代から古墳時代にかけての小礫などが散布する住居跡について」『浦和市史研究』3	
昭和 64 平成元	1989	深谷市城北遺跡 児玉町藤塚遺跡Ａ地点	富田和夫『中三谷遺跡』埼玉埋文報告書 76 川口潤『本郷前東遺跡』埼玉埋文報告書 78 立石盛詞『御伊勢原』埼玉埋文報告書 79	埼玉県「古墳群詳細分布調査」を開始
平成 2	1990	深谷市城北遺跡	小倉均「弥生時代から古墳時代にかけてみられる祭壇状遺構」『埼玉考古』27	埼玉県立埋蔵文化財センター設立
平成 3	1991		吉田稔『小敷田遺跡』埼玉埋文報告書 95	『古墳時代の研究』3 生活と祭祀
平成 4	1992	熊谷市西別府祭祀遺跡 (2 次)	田中広明『新屋敷東・本郷前東』埼玉埋文報告書 111 木戸春夫『荒川附遺跡』埼玉埋文報告書 112 山川守男「古墳時代馬小考」『研究紀要』9	三重県埋蔵文化財センター『城之腰遺跡』
平成 5	1993	熊谷市諏訪木遺跡 杉戸町向山遺跡	増田逸朗「埼玉県の祭祀遺跡」『古墳時代の祭祀』 坂本和俊「古墳時代の祭祀研究の問題点」同上書 瀧瀬芳之・山本靖『上敷免遺跡』埼玉埋文報告書 128 村上泰司「環形囲繞遺構小考 - 古墳時代における集落内施設の一様相 -」『土曜考古』17	東日本埋蔵文化財研究会『古墳時代の祭祀 - 祭祀関係の遺跡と遺物 -』
平成 6	1994	熊谷市諏訪木遺跡 深谷市砂田前遺跡 本庄市万年寺つつじ山古墳	増田逸朗「有線円板形石製模造品小考」『情報祭祀考古』創刊号	祭祀考古学会設立 奈良県南郷大東遺跡の調査 埼玉県教育委員会『埼玉県古墳群詳細分布調査報告書』
平成 7	1995	熊谷市諏訪木遺跡 北本市庚塚遺跡 深谷市砂田前遺跡 行田市築道下遺跡 本庄市地神遺跡	劔持和夫『森下・戸森松原・起会』埼玉埋文報告書 148 山川守男『城北遺跡』埼玉埋文報告書 150 鈴木徳雄『堀向・藤塚Ａ・柿島・内手Ｂ・Ｃ・児玉条里遺跡』 山川守男「埼玉県深谷市城北遺跡の土器集積型祭祀跡」『情報祭祀考古』4 川越市立博物館『川越学事始め～郷土史の系譜を追う～』 岡田賢治「川越氷川神社発見の剣形品に就いて」『博物館だより』13	阪神・淡路大震災 (1 月 17 日)
平成 8	1996	行田市築道下遺跡 本庄市地神遺跡	平岩俊哉「古墳時代集落祭祀の一考察」『研究紀要』12 平岩俊哉「古墳時代集落内祭祀小考」『博古研究』12 鈴木徳雄「古代北武蔵の開発と集落」『月刊文化財』11 月号	日本考古学協会 三重大会『水辺の祭祀』

和暦	西暦	調査・発見	研究・文献	当時の出来事
平成 9	1997	行田市築道下遺跡 児玉町秋山大町遺跡	吉田稔『築道下遺跡Ⅰ』埼玉埋文報告書 188 瀧瀬芳之ほか『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉埋文報告書 191 坂本和俊「河童・駒・鎌・竈」『祭祀考古学』創刊号	
平成 10	1998	行田市築道下遺跡 熊谷市一本木前遺跡 児玉町秋山大町遺跡	岩瀬譲『地神／塔頭』埼玉埋文報告書 193 佐藤康二『砂田前遺跡』埼玉埋文報告書 198 栗岡潤・大屋道則『築道下遺跡Ⅱ』埼玉埋文報告書 199 平岩俊哉「古墳時代の集落内祭祀 - 埼玉県 -」『古代祭祀遺跡公開研究会』	群馬県埋蔵文化財センター『古代祭祀遺跡公開研究会 - 群馬及び隣接諸県における祭祀遺跡研究の現状と課題 -』
平成 11	1999	熊谷市一本木前遺跡 児玉町秋山大町遺跡	平岩俊哉「5 世紀における埼玉県内の集落祭祀」『東国土器研究』5 田中広明・福田聖「遺物から見た『豪族居館』」同上書 磯野治司『庚塚遺跡』北本市埋蔵文化財調査報告書 8	『東国土器研究』5 － 特集 東国における古墳時代中期の土器様相と諸問題 -
平成 12	2000	熊谷市成願遺跡	吉野健『西別府祭祀遺跡』 寺社下博『一本木前遺跡』 劔持和夫『築道下遺跡Ⅲ』埼玉埋文報告書 245 山本靖『築道下遺跡Ⅳ』埼玉埋文報告書 246	前期旧石器捏造事件発覚 （11 月 5 日）
平成 13	2001	熊谷市下田町遺跡 (2 次)	平岩俊哉「古墳時代集落祭祀とその周辺」『日本考古学の基礎研究』 吉野健『諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会	
平成 14	2002	熊谷市下田町遺跡 (3 次)	杉山林繼『子持勾玉資料編』國學院大學日本文化研究所 増田逸朗『古代王権と武蔵国の考古学』 島村薫『木津内貝塚・向山遺跡』杉戸町文化財調査報告書 6 山本靖『成願遺跡』埼玉埋文報告書 274	『六大 A 遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 115 － 16
平成 15	2003	東松山市城敷遺跡 (1 次) 熊谷市下田町遺跡 (4 次)	高橋一夫『古代東国の考古学的研究』	
平成 16	2004	東松山市城敷遺跡 (2 次) 熊谷市下田町遺跡 (5 次)	寺社下博『一本木前遺跡Ⅴ』 赤熊浩一・岡本健一『下田町遺跡Ⅰ』埼玉埋文報告書 296 塩野博「大里町船木山下出土の重圏文鏡をめぐって」『埼玉の古墳』大里	奈良県高松塚古墳壁画の劣化問題 塩野博『埼玉の古墳』全 5 巻
平成 17	2005	熊谷市西別府祭祀遺跡 (3 次)	吉野健「西別府廃寺・西別府祭祀遺跡について」『武蔵野』81-1 坂本和俊「埼玉の祭祀遺跡と儀礼復原の視点」埼玉県市町村埋蔵文化財担当者研修会議資料 赤熊浩一ほか『下田町遺跡Ⅱ』埼玉埋文報告書 301 的野善行「関東地方出土の土製勾玉」『埼玉考古』40	埋蔵文化財研究会『古墳時代の滑石製品 - その製品と消費 -』
平成 18	2006		深谷市『岡部町史』原始・古代資料編 的野善行『旭・小島古墳群 - 林地区 I-』本庄市埋蔵文化財調査報告書 3 赤熊浩一・瀧瀬芳之『下田町遺跡Ⅲ』埼玉埋文報告書 319 礒﨑一・中山浩彦『下田町遺跡Ⅳ』埼玉埋文報告書 320 赤熊浩一「古墳時代の河川交易」『研究紀要』21	埼玉県立埋蔵文化財センター廃止、埼玉県文化財収蔵施設設置
平成 19	2007	熊谷市西別府祭祀遺跡 (4 次) 志木市城山遺跡 (60 地点) 行田市池守遺跡 (8 次)	平岩俊哉「古墳時代集落内祭祀の成立」『日中交流の考古学』 埼玉県立川の博物館『水辺のまつり』	
平成 20	2008	東松山市城敷遺跡 (3 次)	尾形敏則『城山遺跡 58・60 地点埋蔵文化財発掘調査報告書』 志木市遺跡調査会報告 17 中島洋一「行田市池守遺跡 (8 次) の調査」『第 41 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』	大平茂『祭祀考古学の研究』 山梨県考古学協会『土製模造品から見た古墳時代の神マツリ』
平成 21	2009	美里町野中遺跡	吉野健『西別府祭祀遺跡Ⅱ』 太田博之「埼玉県本庄市東五十子城跡遺跡 10 号住居出土の鉄器」『考古学雑誌』93-2	
平成 22	2010	坂戸市下田遺跡 (Ⅲ区)	富田和夫・山本靖『銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ』埼玉埋文報告書 369 宮本久子『秋山大町遺跡 - B・C・D・E 地点の調査 -』本庄市遺跡調査会報告書 36	
平成 23	2011	本庄市川越田遺跡 (H 地点) 熊谷市西別府祭祀遺跡 (5・6 次) 羽生市屋敷裏遺跡 (1 次)	三都県公開セミナー『発掘された木器からわかること』 宮井英一『野中／瘻ヶ谷戸』埼玉埋文報告書 377 山本靖『城敷遺跡Ⅱ』埼玉埋文報告書 382 吉野健『西別府祭祀遺跡Ⅲ』 吉野健「西別府廃寺・西別府祭祀遺跡の調査成果」『郡家の成立と機能 - 幡羅遺跡をめぐる問題 -』 吉川宗明『岩石を信仰していた日本人』	東日本大震災 (3 月 11 日)
平成 24	2012		鈴木孝之「古墳時代前期の土器が納められた井戸跡について」『研究紀要』26 椙山林継「西別府祭祀遺跡」『～地中からの息吹～ 熊谷の発掘出土品』	埋文事業団、公益財団法人に移行 群馬県金井東裏遺跡で甲をつけた古墳人発見 笹生衛『日本古代の祭祀考古学』

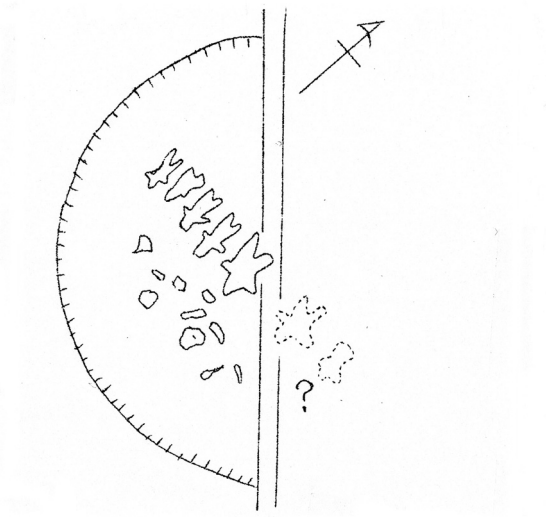
和暦	西暦	調査・発見	研究・文献	当時の出来事
平成 25	2013	羽生市屋敷裏遺跡 (2 次)	福田聖『川越田遺跡Ⅲ』埼玉埋文報告書 400 山本禎『下田遺跡』埼玉埋文報告書 401 吉野健『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡総括報告書Ⅰ』 山本靖「古墳時代における木製品出土状況の解釈」『研究紀要』27 福田聖ほか「川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀 (1)」同上書	
平成 26	2014	宮代町道仏遺跡	福田聖ほか「川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀 (2)」『研究紀要』28	
平成 27	2015		福田聖ほか「川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀 (3)」『研究紀要』29 熊谷市『熊谷市史』資料編 1 考古 太田博之『西富田新田遺跡Ⅲ』本庄市埋蔵文化財調査報告書 45	
平成 28	2016	熊谷市北島遺跡 (25 次)	福田聖『屋敷裏遺跡』埼玉埋文報告書 422 菅谷浩之ほか『長坂聖天塚古墳』美里町遺跡発掘調査報告書 25	笹生衛『神と死者の考古学』
平成 29	2017		石坂俊郎「屋内祭祀の舞台 (1)- 赤砂・小砂利の「祭壇状遺構」-」『埼玉県立史跡の博物館紀要』10 渡邊理伊知「官衙と集落の堺と祭祀」『古代の坂と堺』 青木秀雄『道仏遺跡』宮代町文化財調査報告書 23	
平成 30	2018		吉野健「飛鳥時代の西別府祭祀遺跡 - 湧泉祭祀場 -」『飛鳥時代の役所と地域社会』 知久裕昭『武蔵国幡羅郡から見た古代史』 石坂俊郎「屋内祭祀の舞台 (2)- ムラの中の祭壇付住居 -」『埼玉県立史跡の博物館紀要』11 福田聖『北島遺跡ⅩⅣ』埼玉埋文報告書 446	深谷市・熊谷市幡羅官衙遺跡群国指定史跡
平成 31 令和元	2019	行田市北大竹遺跡 (18 次)	石坂俊郎「屋内祭祀の舞台 (3)-「貯蔵穴」の諸相 -」『埼玉県立史跡の博物館紀要』12 藤野一之『古墳時代の須恵器と地域社会』	『金井東裏遺跡《古墳時代篇》』群馬埋文報告書 652
令和 2	2020	行田市北大竹遺跡 (　〃　)	吉野健「幡羅評家と湧泉祭祀場 - 熊谷市西別府祭祀遺跡 -」『飛鳥時代の東国』 新井端「冑山根岸家所蔵「本村型琴柱形石製品」について」『熊谷市史研究』12 石坂俊郎「屋内祭祀の舞台 (4)- 赤砂・小砂利の「祭壇状遺構」再論 -」『埼玉県立史跡の博物館紀要』13	新型コロナウイルス・パンデミック 行田市埼玉古墳群特別史跡
令和 3	2021		埼玉県埋蔵文化財調査事業団「古のマツリがここにあった！北大竹遺跡 (18 次)」『さいたま埋文リポート 2021』 石坂俊郎「屋内祭祀の舞台 (5)- 土器の群像 -」『埼玉県立史跡の博物館紀要』14 山川守男「下田遺跡と和田吉野川流域の馬事の様相」『埼玉考古』56 知久裕昭「幡羅官衙遺跡出土海産物についての小考」『埼玉史談』66-2	東京オリンピック・パラリンピック 2020 開催 『金井下新田遺跡』群馬埋文報告書 684・698

の西南 4.5㎞、山崎山丘陵の一支丘が東南の水田に向かって突出し、「むじな山」といわれている。標高は約 80 m。昭和 30 年に、傾斜面の東北部で、山林と畑地との境界にほぼ東西に幅 40cm、深さ 70㎝の溝を掘ったところ、中央山林寄りの地点で、地下 80㎝のところから土製人形 5 体が頭部を南にして並んでおり、その南に他の遺物が散在した状態で偶然見つかった（第 3 図）。

発見された遺物は、人形品、動物形品、摘みつき円板、丸玉、容器形品、棒状品などである（小澤 1955・1956、文化財保護委員会 1959）。

小澤による報文の直後、大場は同年 11 月に金谷克己と共に短期間の現地調査を実施している。

こぶヶ谷戸祭祀遺跡　松久丘陵麓の標高 90 m ほどに位置し、遺跡の西 50 m には、小山川の支流の天神川が流れている。こぶ石の名は長さ 75 ㎝、幅 80㎝、厚さ 50㎝の花崗岩質の石をこの名で呼び、この石を中心に祭祀が行われているか



第 3 図　今泉祭祀遺跡遺物出土状況図（小澤1955より）

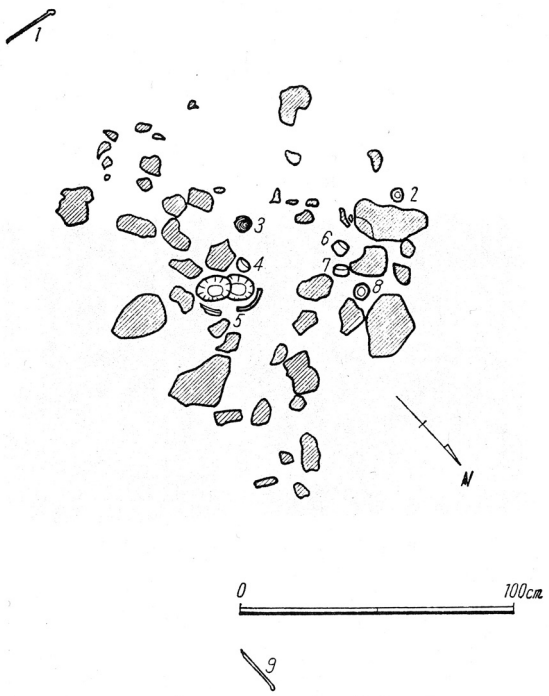
らである。調査は昭和34年と昭和40年(1965)の2回行われている。調査によると遺物はこぶ石を中心に東西15m、南北6～7mの範囲に、地表下30㎝から70㎝の層で、多量の遺物が雑然と検出された。遺物は数多くの手捏土器をはじめ、剣・勾玉・斧などの石製模造品も多く、5世紀から6世紀前半の祭祀遺跡と考えられている（小澤1960・1973、小茂田1965)。大場は2回目の調査時に現地に赴き、調査を指導している。

西別府祭祀遺跡　昭和38年に地元の小学生が湯殿神社の裏で石製模造品を拾ったことが端緒となって、國學院大學の大場と小澤が調査を実施することになった。多数の石製模造品・土器などが出土し、同年には速報的なかたちで、『史跡と美術』に資料紹介と考察を発表している（大場・小澤1963)。櫛形・馬形石製模造品に注目して遺跡の性格や時期を分析し、水辺の祭祀であるこの遺跡の重要性を初めて公表したものである（椙山2012)。

○秩父地域における祭祀遺跡の調査

昭和27年（1952)、昭和29・30年（1954・1955）には玉口時雄・小林茂を中心とする早稲田大学により秩父地域の考古学研究、土師器の様相解明を目的とする学術調査の一環として秩父市上野町遺跡が調査され、1号住居跡の床面上にあった高坏の下から土製臼玉1点が出土した（玉口1956)。

昭和32年（1957）には、峠の研究者としても知られる直良信夫と小林によって秩父市井ノ尻遺跡が学術調査され、石囲い状の配石遺構（祭壇）が検出されている（直良1958)。大形の河原石で外側を囲い、内側を小形の河原石を円形に配した中に、手捏土器10点と須恵器数点が置かれ、遺構の南北両端には鉄鏃が埋置されていた（第4図)。出土した須恵器坏は、平安時代のものであることから、古代に位置づけられることが多いが、手捏土器には古墳時代に遡る特徴も認められる。



（1・9：鉄鏃、3・5：須恵器、2・4・6～8：祭器〔土師器〕）
第4図　井ノ尻遺跡 配石遺跡（直良1958より）

昭和33年（1958）頃、直良・小林が宝登山々頂の宝登山神社奥宮に向かう途中で、参道の切通し面から手捏土器を採集した長瀞町宝登山神社参道遺跡も知られている（大場1972)。

昭和37年（1962）には、皆野町大背戸遺跡から石製模造品28（有孔円板12〔内未製品2〕・臼玉10・勾玉4・剣形品2）が出土したことを玉口・小林が報告している（玉口・小林1965)。

この他に宝登山南方の荒川右岸に立地する皆野町吉丸遺跡からも石製模造品（剣・臼玉）や手捏土器、土製紡錘車などが出土した（大場1972)。

秩父地域では、祭祀の対象・目的を「神奈備山」としての宝登山や武甲山に求めており、古くから信仰の対象となっていたことを窺わせる。

○大場門下生による祭祀遺跡の調査

昭和33年（1958）に妻沼町（現熊谷市）大我井遺跡から見つかった石製模造品を、大場門下生である塩野博が後に紹介している（塩野1968、妻沼町誌編纂委員会1977)。

同じく栗原文蔵は、昭和37年（1962）に団

地造成によって湮滅した上尾市藤波遺跡で、工事に伴って移動した土の中から手捏土器30点以上と土玉などを採集している(栗原1963)。栗原は、小河川の流れる窪地に面する地形の特徴から水の神に関する祭祀を想定している。

○低地遺跡調査の先駆け「見田方遺跡」

昭和41・42年（1966・1967)、和島誠一・三友国五郎・小泉功らを中心に越谷市見田方遺跡が調査され、低地遺跡における祭祀遺構発見の先鞭をつけた（鈴木1967、和島ほか1971)。

○石製模造品出土住居跡に関する研究

昭和46年（1971)、高橋一夫は石製模造品の竪穴住居における出土状況の分析から、家父長制的世帯共同体の確立過程を論じた（高橋1971)。また、剣・玉・鏡を模した石製模造品を、支配集団のイデオロギーを表象した農耕祭祀用具として、それが鬼高Ⅱ式期（6世紀後半）に減少する原因を、開発による地縁的な村落形成とそれに伴う村社の発生に求めている（高橋1975)。

後に坂本和俊は「竪穴住居址内の祭祀と村社の祭祀は、次元がことなり、両者は並行して存在した」と疑問を投げかけている（坂本1993)。

○大場磐雄「埼玉の祭祀遺跡」『神道宗教』

昭和47年（1972)、これまでの研究の到達点といえる大場の論考「埼玉県の祭祀遺跡」が、埼玉県出身の国文学者である西角井正慶の追悼号として刊行された『神道宗教』第65・66号に掲載された。17箇所の祭祀遺跡を「山・水・石・住居内・古墳の封土内・峠神・子持勾玉・単独祭祀遺物」の祭祀対象別に分類し、詳述している。

なお、昭和47年から昭和56年（1981）にかけて、大場と椙山林継が中心となり『神道考古学講座』全6巻が編纂された。大場を中心とした、これまでの研究の集大成ともいえる偉業により、神道考古学は、仏教考古学と並び宗教・信仰という人間の心の営みを研究対象とする日本考古学の一分野として定着した。

○文献史学から見た祭祀遺跡

昭和54・56年（1979・1981)、文献史学的な視点から沼野勉が「古代の神社と祭祀遺跡についての一考察」と題する論文を発表した（沼野1979・1981)。沼野は、神社と祭祀遺跡や集落跡が、祭祀を通して相互に密接な関係性をもって成立、あるいは消滅していることから、「祭祀遺跡の調査と祭祀形態の分析や集落跡の分布などを検討することによって、祭祀遺跡に連なる神社の初源的な祭祀形態が理解できる」との認識を示している。

ただし、式内社と祭祀遺跡との直接的な関連性については慎重に検討すべき問題であるとの見解もある（坂本1993)。

○祭祀遺跡・祭祀遺物「地名表」作成の進展

昭和56年（1981)、椙山が埼玉県内の祭祀遺跡・祭祀遺構34箇所を集成した（椙山1981)。これは大場の論考「埼玉の祭祀遺跡」をもとに、上越新幹線や関越自動車道の調査資料が追加されている。翌年には、小野真一の『祭祀遺跡地名総覧』にも各県の地名表が掲載され（小野1982)、県内40箇所が集成された。

昭和60年（1985）には「古代の祭祀と信仰」と題した国立歴史民俗博物館による共同研究の成果が刊行された。附篇として全国の「祭祀関係遺物出土地地名表」が編まれ、塩野と杉崎茂樹による県内の集成が行われた（塩野・杉崎1985)。

同書に掲載された遺跡・遺構数は125箇所（内訳:祭祀遺跡・祭祀跡13、集落・住居跡99、玉作・工房9、埴輪窯4）を数えるに至った。

2－3　発展期（昭和60年代から平成時代）

昭和37年（1962)、全国総合開発計画が策定され、埼玉県内でも圃場整備事業や住宅団地建設などの公共事業を中心とした大規模開発が計画されるようになり、発掘件数も急激に増加した。それを受け、昭和42年（1967）に埼玉県遺跡調査会が発足し、民間開発に対応するとともに、東

北自動車道や関越自動車道などの高速道路の建設が本格化するのに伴い、埼玉県でも昭和46年（1971）に文化財保護室が設置され、その対応に追われた。

以後、県内市町村にも文化財担当の職員が配属されるようになり、昭和55年（1980）には財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が設立され、県内全域に調査の手が及ぶようになった。

そして、昭和60年代以降のバブル景気、バブル崩壊後の景気の後退など、「失われた30年」と呼ばれる社会経済の低迷期とは裏腹に、調査事例の増加による研究の「発展期」を迎えた。

○祭祀遺跡を取り巻く研究状況の変化

全国に目を向けると、奈良県南郷大東遺跡、三重県城之腰遺跡・六大A遺跡、静岡県桓武山ノ花遺跡、長野県青木下遺跡、千葉県マミヤク遺跡・千束台遺跡、群馬県下芝天神遺跡・金井東裏遺跡、福島県清水内遺跡など、これまでの常識を覆すような多彩な祭祀遺跡が調査され、シンポジウムや展覧会が各地で開催された。

この時期、県内でも集落全体を明らかにするような広範囲におよぶ発掘調査が増加し、住居に伴う神祭りや、集落の中での神祭り、集落縁辺部で行われる神祭りなど、多数の場面で執り行われた祭りの実態が明らかになってきた。

こうした研究状況を踏まえ、平成5年（1993）に東日本埋蔵文化財研究会が研究集会『古墳時代の祭祀』を開催し、国立歴史民俗博物館の地名表を基礎に全国の遺跡と遺物の集成が図られた（北武蔵古代文化研究会1993）。地名表とともに、遺構図・遺物実測図が掲載されたことにより、基礎資料の蓄積が飛躍的に進んだ。本県の様相について増田逸朗がまとめ、175遺跡が網羅された（増田1993）。

翌年には、椙山が「祭祀考古学会」を設立し、日本列島の祭祀儀礼を、朝鮮半島・中国大陸を含めた東洋的な視点で明らかにしようとする「祭祀考古学」が提唱され、研究面でも大きな転換期を迎えた。

○主な祭祀遺跡（遺構）・祭祀遺物の調査事例

次に、県内の代表的な調査例を列記する。

- 川越市女堀Ⅱ遺跡、琴柱形石製品（宮山型）を出土した円形土壙や長方形土壙が検出された（立石1987）。
- 川越市御伊勢原遺跡、大規模調査により集落内祭祀の全体像が明らかになった（立石1989）。
- 深谷市本郷前遺跡（川口1989）、同新屋敷東遺跡（田中1992）から櫛形模造品・有線円板が出土した。
- 深谷市上敷免遺跡、住居跡のカマド内から子持勾玉が出土した（瀧瀬・山本1993）。
- 深谷市城北遺跡、土器集積型祭祀遺構と水辺の祭祀跡が発見された（山川1995a・b）。
- 深谷市起会遺跡、河川跡の肩部に並列された古墳時代中期の土器群が2箇所発見された（劔持1995）。
- 古墳時代中期の水路の分岐点で執り行われた祭祀に伴う石製模造品が出土した児玉町藤塚遺跡A地点（鈴木1995・1996）
- 河川跡に伴う水辺の祭祀跡が発見された本庄市今井川越田遺跡（瀧瀬1997）。
- 本庄市地神遺跡、樹木祭祀と考えられる古墳時代前期の倒木痕が検出された(岩瀬1998)。
- 大量の土器と馬骨を伴う祭祀跡の見つかった熊谷市一本木前遺跡（寺社下2000・2004）。
- 熊谷市教育委員会による熊谷市西別府祭祀跡の再調査（吉野・松田2000、吉野2005ほか）。
- 熊谷市諏訪木遺跡、拳大の礫を敷き詰めた祭祀跡が発見された（吉野2001）。
- 志木市城山遺跡60地点、住居跡から鈴鏡形・素文鏡形・勾玉形土製品がまとまって出土した（尾形2008）。
- 河川跡から高床倉の部材が出土した東松山市城敷遺跡（富田・山本2010、山本2011）。

・本庄市秋山大町遺跡、住居跡と溝跡から子持勾玉が出土した（宮本 2010）。
・大量の手捏土器と鉄鏃を伴う水の祭祀跡が検出された本庄市川越田遺跡H地点（福田 2013）。
・熊谷市北島遺跡 25 次調査、居住域から 7 世紀前半を中心とする土器集中（廃棄儀礼）が検出された（福田 2018）。

○祭祀遺跡の出現時期について

今泉（狢山）祭祀遺跡を再検討した坂本は、その出現時期を平底の埦、脚裾部に段を有する高坏、小型丸底土器を模したと思われる手捏土器の存在から、丸底の埦・坏類が増加する TK208 型式期よりも古い、TK216 型式期か、それよりも古い時期まで遡る可能性を示唆した。

また、中期の方墳であることが明らかになった狢塚 5 号墳との関連性から、人形などの土製模造品による祭祀が渡来系の人によって 5 世紀前半に導入された可能性を想定している（坂本 2014）。

○集落内祭祀研究の進展

平岩俊哉は、集落内祭祀の実態解明について精力的に研究を行った（平岩 1996・1998・1999・2001・2007）。古墳時代の集落内祭祀を、遺物の埋納型 (土壙型)、集積型、散布 (散在) 型、配列型の 4 つに分類し、埋納型を除く、後 3 者について類似した性格を想定した（平岩 1996 a）。すなわち、各類型は土器が集積されるか（集積型）、散布されるか（散布型）、配列されるか（配列型）の違いはあるものの、いずれも祭祀終了後に、使用された土器が片付けられたり、無造作に捨てられたりすることなく、地表面に残されることでは共通している。従って、祭祀に使用された土器が「祭祀終了後もその場所に『存在』することが大切だった」として、「祭祀跡を集落内の一角に置き続けることで『信仰』のかたちを残したのかもしれない」と結論づけている。また、土器を集積する行為に対して、「祭祀を終了した跡も土器の集積は意識的に残され、信仰の場として認識された」ものと解釈し、そこに祭場の固定化が見られると考え、祭場の固定化は、後の神社建築につながるものと想定した。

さらに、その後の研究において「5 世紀から 6 世紀にかけての古墳時代の祭祀において甕と坏を中心とした集積ないし、配列の形態が普及しつつあった」と指摘し、その背景として「集積型ないし配列型の祭祀形態が一般化するということは、古墳時代の人にとって、信仰の対象としての「カミ」への認識が明確化すると共に祭祀の方法が整備・定型化の方向に進んでいた」ことを示すものととらえた（平岩 2001）。

なお、平岩は上記した型の祭祀跡は、古墳時代の集落に普遍的なものでないことから、「住居内での祭祀の対応範囲を超えた場合、集落全体の大事を解決する際に行われた祭祀の跡としてとらえるべき」ものとも述べている（平岩 2001）。

○住居内祭祀の多様性

カマドや住居を構築する際や廃棄する際における祭祀行為の痕跡として、カマドの構築粘土内や床面の貼床に石製模造品や臼玉などが埋め込まれた事例が、上里町東猿見堂遺跡、本庄市下田遺跡・社具路遺跡・南大通り線内遺跡などで見つかっている。同様に、さいたま市染谷遺跡群のＡ -178 遺跡では、住居の貼床内から有孔円板が出土した。

桜井秀雄が指摘するように、石製模造品は祭具としての性格だけでなく、呪具としての性格をあわせもつものと考えられる（桜井 2002）。

○水辺の祭祀の実態解明

集落域の周辺にまで調査が進み、旧河川に伴う様々な水辺の祭祀の実態が明らかになった。

熊谷市下田町遺跡の第 80 号溝跡からは、多量の土器とともに馬の歯骨が出土している。類例として、熊谷市一本木前遺跡と同市諏訪木遺跡がある。どちらも河川に面した場所に石を敷き詰め、一本木前遺跡では石製模造品、諏訪木遺跡では石製の丸玉・管玉、ガラス小玉、耳環、鉄製品など

を伴う祭祀遺構が見つかっている。

山川守男は、馬匹生産にまつわる祭祀行為との関連性を想定している（山川 2021）。

また、本庄市川越田遺跡Ｈ地点では、遺物の平面・垂直分布の検討や、手捏土器の徹底した観察による分類など詳細な分析によって、具体的な祭祀行為とその対象、効果の強弱といった祭祀の実態解明に迫った（福田ほか 2013 ～ 2015）。

○祭祀具としての木製品

これまで調査例のほとんどなかった、低湿地での発掘調査が本格化したことにより、木製品を多量に出土する遺構が調査され、多様な木製品を使用した祭祀行為の実態が明らかになった。

なかでも行田市池守遺跡８次調査では、地機の機台の中筒受けが出土し、神祭りと布生産との関連性を考える上で注目される（中島 2008）。

○祭祀場と高床倉について

高坂台地の眼下に広がる、都幾川の形成した低地に立地する東松山市城敷遺跡では、石製模造品を製作した８軒の工房跡と石製模造品を使用した２箇所の祭祀跡が見つかっている。石製模造品の製作から使用の実態が具体的に把握できる数少ない遺跡として注目される。

さらに、集落域を縫うように流れる河川跡からは、高床倉との関連が想定される閂穴付きの扉材と楣、梯子材といった部材などの木製品などが多数出土している（富田・山本 2010、山本 2011a）。

笹生衛によれば、「古代の祭祀の場は、大場が想像したような石製・土製模造品などの祭祀遺物や土器類がまとまって出土するのみの単純な構造ではなく、多様な施設・建物の複合体であった可能性が高い」と指摘する（笹生 2019）。まさしく城敷遺跡は、祭祀場を立体的に復元することのできる遺跡として重要である（山本 2011 ｂ・2013）。

○玉を入れた土器

城北遺跡や北大竹遺跡などの土器集積遺構では、臼玉や石製模造品が土器の中に納められた状態で出土しているものも多い。これらは土器の中に意図的に納められた場合や、土器の集積行為のある段階で、振り撒かれ偶然玉が入った場合の両方が考えられている（山川 1995a）。

ここでは、住居内に置かれた玉を入れた土器について着目したい。

東松山市番清水遺跡では、47 号住居跡のカマド左側に置かれてあった甕の中に 338 点の大量の滑石製臼玉があった。報告者は「これはおそらく甕形土器の中に収蔵されていたもの」と推定している（金井塚 1968）。深谷市砂田前遺跡では、焼失住居と考えられる 42 号住居跡から出土した坏の中に滑石製臼玉 99 点とペンダントトップと考えられる単孔円板１点が、紐に繋がれたような状態で出土した。床面上に堆積した炭化物層の上に土器がのっていることから、住居焼失後に意図的に置かれていたものと考えられる（佐藤 1998）。さいたま市御蔵台遺跡２号住居跡では、口縁部を欠損する壺の中に滑石製臼玉１点が入っていた。焼失住居で、床面からは他に滑石製勾玉が出土している（大宮市遺跡調査会 1990）。

玉城一枝は、土器入りの玉をもつ住居は同一集落内でも限られていることから、「玉を容器に入れる行為が、各戸単位の祭祀行為というよりも特殊な職能の人物とのかかわりや、集落単位の祭祀を示唆する」ものと注視している（玉城 1994）。

２－４　成熟期（令和時代）

吉野健、知久裕昭の研究（吉野 2018、知久 2018）により、西別府祭祀遺跡と幡羅官衙遺跡群との有機的な関連性が解明され、平成 30 年に国史跡指定として結実した。本県の祭祀遺跡の調査・研究に一区切りついた感があったが、冒頭でも触れた令和元年における北大竹遺跡の発見は、今後の研究の進展を予見するのに十分な内容であった。

○北大竹遺跡（第 18 次）B区の調査

行田市北大竹遺跡第 18 次調査における祭祀遺構群の発見は、あまりにも衝撃的であった。今後の祭祀遺跡研究に与える影響は計り知れないものがある。とりわけ土師器・須恵器を含む大量の土器群とともに、石製模造品・鉄製模造品などがまとまって出土している。ひとつの遺跡から出土した子持勾玉としては国内最多を誇る 40 数点の出土は注目に値する。また、単鳳環頭大刀柄頭は威信財として、あるいは神の依代としての位置づけなど、今後の研究の展開が期待される。

古墳時代的な祭祀から律令時代的な祭祀への過渡期の様相を複眼的に分析することが今後の大きな課題であろう。北大竹遺跡第 18 次調査の調査成果（註２）を足がかりに、新しい研究のステージへと昇華することが期待される。

3　おわりに

これまで述べてきたように、埼玉県における祭祀遺跡･祭祀遺物に関する研究は､永い歴史をもっている。しかしながら、多様な特徴を示す祭祀遺跡の性格から地域社会の様態を描き出す作業は、まだ緒についたばかりである。

平成５年に開催された東日本埋蔵文化財研究会の『古墳時代の祭祀』から既に 30 年近くが経過しており、県内でも数多くの調査事例が蓄積されている。再び、県内の資料を網羅し、これまでの研究を総括し、新地平を開く時期に来ている。

註１　令和３年６月 23 日、埼玉県立熊谷図書館埼玉資料室にて実見。

註２　北大竹遺跡（第 18 次）の調査成果は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 477 集として令和４年３月に刊行予定である。

引用・参考文献

青木秀雄　2017 『道仏遺跡』宮代町文化財調査報告書第 23 集

赤熊浩一　2006 「古墳時代の河川交易」『研究紀要』第 21 号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

赤熊浩一・岡本健一　2004 『下田町遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 296 集

赤熊浩一・岡本健一・松岡有希子　2005 『下田町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 301 集

赤熊浩一・瀧瀬芳之　2006 『下田町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 319 集

新井　端　2020 「胄山根岸家所蔵「本村型琴柱形石製品」について」『熊谷市史研究』第 12 号　熊谷市教育委員会

有隅豊吉　1931 「原始時代に関する村考 (抄)」『鶴ヶ島研究』４　鶴ヶ島町史編さん室

石坂俊郎　2017 「屋内祭祀の舞台（１）－赤砂・小砂利の「祭壇状遺構」－」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 10 号

石坂俊郎　2018 「屋内祭祀の舞台（２）－ムラの中の祭壇付住居－」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 11 号

石坂俊郎　2019 「屋内祭祀の舞台（３）－「貯蔵穴」の諸相－」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 12 号

石坂俊郎　2020 「屋内祭祀の舞台（４）－赤砂・小砂利の「祭壇状遺構」再論－」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 13 号

石坂俊郎　2021 「屋内祭祀の舞台（５）－土器の群像－」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 14 号

礒﨑　一・山本　靖　2005 『北島遺跡ⅩⅢ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 305 集

礒﨑　一・中山浩彦　2006 『下田町遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 320 集

磯野治司　1999 『庚塚遺跡』北本市埋蔵文化財調査報告書第８集

稲村坦元・柴田常恵　1951 『埼玉縣史 第１巻 先史原史時代』埼玉縣

井上尚明　2020 「小澤國平の考古学」『日本考古学史研究』第８号　日本考古学史学会

岩澤正作　1926 「児玉郡々志資料視察雑記（1）」『上毛及上毛人　丙寅２月號』第 106 號　上毛郷土史研究会
岩瀬　譲　1998 『地神／塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 193 集
太田博之　2009 「埼玉県本庄市東五十子城跡遺跡 10 号住居出土の鉄器」『考古学雑誌』第 93 号第２号　日本考古学会
太田博之　2015 『西富田新田遺跡Ⅲ』本庄市埋蔵文化財調査報告書第 45 集
大野延太郎　1900 a 「安房國安房郡東長田村遺跡に付て」『東京人類学雑誌』第 15 巻第 167 号　東京人類学会
大野延太郎　1900 b 「石製模造品に就て」『東京人類学会雑誌』第 15 巻第 169 号　東京人類学会
大場磐雄　1935 「神道考古学の提唱と其の組織」『神社協会雑誌』第 34 年第１巻　神社協会出版部
大場磐雄　1943 『神道考古学論攷』葦牙書房
大場磐雄　1966 「祭祀遺跡について」『埼玉県神社庁報』№64
大場磐雄　1972 「埼玉県の祭祀遺跡」『神道宗教』第 65・66 号
大場磐雄・小澤國平　1963 「新発見の祭祀遺跡」『史跡と美術』第 338 号
大宮市遺跡調査会　1990 『御蔵台遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊６
岡田賢治　1995 「川越氷川神社発見の剣形品に就いて」『博物館だより』第 13 号　川越市立博物館
岡田賢治　1995 『川越学事始め～郷土史の系譜を追う～』川越市立博物館
尾形敏則　2008 『城山遺跡第 58・60 地点埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会報告第 17 集
小倉　均　1988 「弥生時代から古墳時代にかけての小礫などが散布する住居跡について」『浦和市史研究』第３号
小倉　均　1990 「弥生時代から古墳時代にかけてみられる祭壇状遺構」『埼玉考古』第 27 号
小澤國平　1955 『今泉祭祀址と祭器』
小澤國平　1956 「岡部村今泉出土の祭器」『武蔵野史談』第３巻第３号
小澤國平　1960 『こぶヶ谷戸祭祀遺跡発掘調査報告書』美里村教育委員会
小澤國平　1973 「美里村こぶヶ谷戸祭祀遺跡発掘調査概要」『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧』埼玉県教育委員会
小野真一　1982 『祭祀遺跡地名総覧』考古学ライブラリー 11　ニュー・サイエンス社
金井塚良一　1968 『番清水遺跡調査概報』埼玉県遺跡調査会報告第１集
金鑽宮守　1926 『自治資料 埼玉縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第３輯 史蹟之部』埼玉縣
亀井正道　1973 「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』第８号
川口　潤　1989 『本郷前東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 78 集
北武蔵古代文化研究会　1993　第２回東日本埋蔵文化財研究会『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』
木戸春夫　1992 『荒川附遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 112 集
熊谷市　2015 『熊谷市史』資料編１ 考古
栗岡　潤・大屋道則　1998 『築道下遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 199 集
栗原文蔵　1963 「上尾市藤波発見の祭祀遺物」『埼玉研究』第７号
劔持和夫　1995 『森下・戸森松原・起会』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 148 集
劔持和夫　2000 『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 245 集
小暮秀夫　1927 『武蔵國兒玉郡誌』
後藤守一　1930 「石製品」『考古学講座』第 29 巻　国史講習会 雄山閣
駒井和愛　1955 「埼玉県北埼玉郡水深遺跡」『日本考古学年報』３
小茂田　勇　1965 「こぶヶ谷戸祭祀遺跡発掘概報」『いぶき』第１号　本庄高等学校考古学部
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2021 「古のマツリがここにあった！北大竹遺跡（第 18 次）」『さいたま埋文リポート 2021』
斎藤　忠　1985 『考古学史の人びと』第一書房
坂本和俊　1993 「古墳時代の祭祀研究の問題点」『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』
坂本和俊　1997 「河童・駒・鎌・竈－考古学的に見た河童駒引きの周辺－」『祭祀考古学』創刊号　祭祀考古学会

坂本和俊　2005 「埼玉の祭祀遺跡と儀礼復原の視点」（平成 17 年度埼玉県市町村埋蔵文化財担当者研修会議資料）
坂本和俊　2014 「Ⅳ 狢山５号墳をめぐる諸問題」『深谷市内遺跡ＸＸ』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第 139 集
坂本和俊・鈴木徳雄　1981 『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第２集
桜井秀雄　2002 「「祭具」と「呪物」－石製模造品の二つの性格－」『長野県の考古学Ⅱ』長野県埋蔵文化財センター
笹生　衛　2019 「神道考古学から祭祀考古学へ－最近の祭祀遺跡研究から見た古代祭祀の実態と神観－」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第 10 号
佐藤康二　1998 『砂田前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 198 集
塩野　博　1968 「妻沼町太我井遺跡発見の祭祀遺物」『埼玉研究』第 16 号
塩野　博　2004 「大里町船木山下出土の重圏文鏡をめぐって」『埼玉の古墳』大里　さきたま出版会
塩野　博・杉崎茂樹　1985 「埼玉県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集　共同研究「古代の祭祀と信仰」附篇「祭祀関係遺物出土地名表」
寺社下　博　2000 『一本木前遺跡』平成 11 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
寺社下　博　2004 『一本木前遺跡Ⅴ』熊谷市教育委員会
志塚徳行　2021 「13　亀の子山（甘粕）」『美里町の昔ばなし』美里町文化財ガイドブック２　美里町教育委員会
柴田常恵　1903 「武蔵の古墳」『東京人類学会雑誌』第 18 巻第 207 号
柴田常恵　1904 「埼玉、群馬両縣下踏査概記」『東京人類学会雑誌』第 19 巻第 216 号
柴田常恵　1924 「祭祀阯」『日本考古学』国史講習録第 19 巻　国史講習会
島村　薫・福田　聖　2002 『木津内貝塚・向山遺跡』杉戸町文化財調査報告書第６集
末木啓介　2007 『水辺のまつり－受け継がれてきた川への祈り－』埼玉県立川の博物館
菅谷浩之ほか　2016 『長坂聖天塚古墳』美里町遺跡発掘調査報告書第 25 集
椙山林継　1972 「関東」『神道考古学講座』第２巻　雄山閣
椙山林継　1981 「祭祀遺跡地名表（２）関東編２」『神道考古学講座』第３巻　雄山閣
椙山林継　2012 「西別府祭祀跡」『～地中からの息吹～ 熊谷の発掘出土品』熊谷市立熊谷図書館
杉山林繼編　2002 『子持勾玉資料編』國學院大學 日本文化研究所　慶友社
鈴木貴徳　1967 「見田方遺跡発掘」『ひびき』第９号　不動岡高等学校社会部
鈴木孝之　2012 「古墳時代前期の土器が納められた井戸跡について」『研究紀要』第 26 号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木敏昭　1986 『古代の祭祀（まつり）』埼玉県立博物館
鈴木徳雄　1987 「古代那珂郡における水利灌漑と在地信仰」『秋山東遺跡』児玉町遺跡調査会報告書第２集
鈴木徳雄　1995 『堀向・藤塚Ａ・柿島・内手Ｂ・Ｃ・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第 18 集
鈴木徳雄　1996 「古代北武蔵の開発と集落―埼玉県北部の灌漑方式の変化を中心に―」『月刊文化財』平成８年 11 月号
大護八郎　1954 『遠古の川越』川越叢書第３巻
大護八郎　1972 『川越市史』第１巻 原始・古代編
高橋一夫　1971 「石製模造品出土の住居跡とその性格」『考古学研究』第 18 巻第３号　考古学研究会
高橋一夫　1975 「和泉・鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究』２　校倉書房
高橋一夫　1977 「考古学研究と三段階論」『情報』３　埼玉考古学会
高橋一夫　1980 「６世紀の集落と人々」『鉄剣を出した国』学生社
高橋一夫　2003 『古代東国の考古学的研究』六一書房
高橋健自　1919 『古墳発見石製模造器具の研究』帝室博物館学報１
瀧瀬芳之・山本　靖　1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 128 集
瀧瀬芳之　1997 『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 191 集
立石盛詞　1987 『女堀Ⅱ・東女堀原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 68 集
立石盛詞　1989 『御伊勢原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 79 集

田中広明　1992 『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 111 集
田中広明・福田　聖　1999 「遺物から見た『豪族居館』」『東国土器研究』第５号
谷井　彪　1974 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』埼玉県遺跡発掘調査報告書第５集
玉城一枝　1994 「土器に入れた玉」『同志社大学考古学シリーズⅥ　考古学と信仰』
玉口時雄　1956 『秩父－土師器を中心として－』秩父市文化財保護委員会
玉口時雄・小林　茂　1965 「秩父・大背戸遺跡採集の石製模造品について」『埼玉考古』第３号　埼玉考古学会
知久裕昭　2018 『武蔵国幡羅郡から見た古代史』まつやま書房
知久裕昭　2021 「幡羅官衙遺跡出土海産物についての小考」『埼玉史談』第 66 巻第２号　埼玉県郷土文化会
塚本国男　1984 「川越市小堤字新嘗井の祭祀遺跡」『いしずえ』第７号
富田和夫　1989 『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 76 集
富田和夫・山本　靖　2010 『銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 369 集
直良信夫　1958 「埼玉県秩父市井ノ尻遺跡」『日本考古学年報』10
中島洋一　2008 「行田市池守遺跡 (第８次) の調査」『第 41 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか
中村耕作　2009 「大場磐雄「神道考古学」提唱前夜の祭祀遺跡研究」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第１号
西川　制　1981 『脚折遺跡群発掘調査報告書』鶴ヶ島町教育委員会
沼野　勉　1979 「古代の神社と祭祀遺跡についての一考察 (上)」『埼玉地方史』第７号　埼玉県地方史研究会
沼野　勉　1981 「古代の神社と祭祀遺跡についての一考察 (下)」『埼玉地方史』第 11 号　埼玉県地方史研究会
平岩俊哉　1996 a 「古墳時代集落祭祀の一考察」『研究紀要』第 12 号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
平岩俊哉　1996 b 「古墳時代集落内祭祀小考」『博古研究』第 12 号　博古研究会
平岩俊哉　1998 「古墳時代の集落内祭祀－埼玉県－」『古代祭祀遺跡公開研究会』群馬県埋蔵文化財調査センター
平岩俊哉　1999 「５世紀における埼玉県内の集落祭祀」『東国土器研究』第５号　東国土器研究会
平岩俊哉　2001 「古墳時代集落祭祀とその周辺」『日本考古学の基礎研究－茨城大学人文学部考古学研究報告第４冊－』
平岩俊哉　2007 「古墳時代集落内祭祀の成立」『日中交流の考古学』同成社
深谷市　2006 『岡部町史』原始・古代資料編
福田　聖　2013 『川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 400 集
福田　聖　2016 『屋敷裏遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 422 集
福田　聖ほか　2013 「川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀（１)」『研究紀要』第 27 号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
福田　聖ほか　2014 「川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀（２)」『研究紀要』第 28 号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
福田　聖ほか　2015 「川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀（３)」『研究紀要』第 29 号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
福田　聖ほか　2018 『北島遺跡ⅩⅣ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 446 集
藤野一之　2019 『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房
文化財保護委員会　1959 「12．今泉祭祀遺跡出土品一括」『埋蔵文化財要覧』２
増田逸朗　1987 「古墳時代の信仰と祭祀」『新編埼玉県史』通史編１ 原始・古代
増田逸朗　1993 「埼玉県の祭祀遺跡」『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』
増田逸朗　1994 「有線円板形石製模造品小考」『情報 祭祀考古』創刊号　祭祀考古学会
増田逸朗　2002 『古代王権と武蔵国の考古学』慶友社
増田逸朗ほか　1982 『後張Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 15 集
増田逸朗ほか　1983 『後張Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 26 集
的野善行　2005 「関東地方出土の土製勾玉」『埼玉考古』第 40 号　埼玉考古学会
的野善行　2006 『旭・小島古墳群－林地区Ⅰ－』本庄市埋蔵文化財調査報告書３
水島治平ほか　1976 「東五十子城跡遺跡」『本庄市史』資料編　本庄市

宮井英一　2011　『野中／瘻ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 377 集
宮瀧交二　2006　「武蔵国大里郡大字胄山小字雷発見の「田村」と記した祝部土器－明治十一年発見の墨書土器について－」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会
宮本久子　2010　『秋山大町遺跡－Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ地点の調査－』本庄市遺跡調査会報告書第 36 集
村井嵓雄　1956　「武蔵国川田谷熊野神社境内所在の古墳」『考古学雑誌』第 41 巻第 3 号
村上泰司　1993　「環形囲繞遺構小考－古墳時代における集落内施設の一様相－」『土曜考古』第 17 号　土曜考古学研究会
妻沼町誌編纂委員会　1977　『妻沼町誌』妻沼町役場
山川守男　1992　「古墳時代馬小考」『研究紀要』第９号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
山川守男　1995 a　『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 150 集
山川守男　1995 b　「埼玉県深谷市城北遺跡の土器集積型祭祀跡－古墳時代後期の集落内祭祀－」『情報 祭祀考古』第 4 号
山川守男　1995 c　「北武蔵の古墳時代馬飼養地域」『研究紀要』第 12 号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
山川守男　2021　「下田町遺跡と和田吉野川流域の馬事の様相」『埼玉考古』第 56 号　埼玉考古学会
山本　禎　2013　『下田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 401 集
山本　靖　2000　『築道下遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 246 集
山本　靖　2002　『成願遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 274 集
山本　靖　2011 a　『城敷遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 382 集
山本　靖　2011 b　「掘り出された古墳時代の木器－北島遺跡とその周辺－」『発掘された木器からわかること』平成 22 年度東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
山本　靖　2013　「古墳時代における木製品出土状況の解釈」『研究紀要』第 27 号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
山田勝利　1966　「川越氷川神社の石剣について」『埼玉県神社庁報』№.64
柳田敏司　1963　「本庄市公卿塚と石製模造品」『埼玉考古』復刊第 1 号　埼玉考古学会
吉川宗明　2011　『岩石を信仰していた日本人－石神・磐座・磐境・奇岩・巨石と呼ばれるものの研究－』遊タイム出版
吉田　稔　1991　『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 95 集
吉田　稔　1997　『築道下遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 188 集
吉野　健・松田　哲　2000　『西別府祭祀遺跡』平成 11 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　熊谷市教育委員会
吉野　健　2001　『諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財報告書　熊谷市遺跡調査会
吉野　健　2005　「西別府廃寺・西別府祭祀遺跡について」『武蔵野』第 81 巻第 1 号　武蔵野文化協会
吉野　健　2009　『西別府祭祀遺跡Ⅱ－西別府遺跡群確認調査報告書Ⅰ－』熊谷市埋蔵文化財調査報告書第 5 集
吉野　健　2011 a　『西別府祭祀遺跡Ⅲ』熊谷市埋蔵文化財調査報告書第 11 集
吉野　健　2011 b　「西別府廃寺・西別府祭祀遺跡の調査成果」『シンポジウム　郡家の成立と機能－幡羅遺跡をめぐる問題－』深谷市教育委員会
吉野　健　2013　『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡　総括報告書Ⅰ』
吉野　健　2016　『西別府祭祀遺跡Ⅳ－西別府官衙遺跡群確認調査報告書Ⅳ－』熊谷市埋蔵文化財調査報告書第 24 集
吉野　健　2018　「飛鳥時代の西別府祭祀遺跡－湧泉祭祀場－」『飛鳥時代の役所と地域社会』予稿集　深谷市教育委員会
吉野　健　2020　「幡羅評家と湧泉祭祀場－熊谷市西別府祭祀遺跡－」『飛鳥時代の東国』高志書院
吉見村　1880　『武蔵国大里郡吉見村誌』「村誌　大里郡胄山村」
和島誠一ほか　1971　『見田方遺跡発掘調査報告書』越谷市教育員会
渡邊理伊知　2017　「官衙と集落の堺と祭祀」『古代の坂と堺』高志書院